

文教大学文学部日本語日本文学科所蔵

『さざれ石』について

日 沖 敦 子

『さざれ石』は、室町末から江戸時代はじめにかけて数多く制作されたお伽草子作品のひとつである。お伽草子のなかでも祝儀物に分類される作品で、『古今和歌集』(巻七・三四三)の賀部の巻頭歌に詠まれた「わが君は千代に八千代にさざれ石の巖と成りて苔のむすまで」(題しらず、読人しらず)の和歌が、当時、物語として流布していたことが窺える興味深い作品である。

右の巻頭歌の元歌と考えられている和歌に、和銅四年(七一)、河辺宮人が姫島の松原で若い女性の入水した亡骸を見て悲しんで詠んだ二首のうちの一首「妹が名は千代に流れむ姫島の小松が末に苔生すまでに」(『万葉集』巻一・一二八)がある。しかし『万葉集』では「さざれ石」とは詠まれておらず、「さざれ石」が永遠の繁栄を願う存在として詠まれるのは、右の巻頭歌のほか、仮名序に「さざれ石の巖となる喜びのみぞあるべき」等の詞が見られるのが古例である。以降、『拾遺和歌集』

(巻五・二七七)には「清慎公五十の賀し侍りける時の屏風に元輔」として、「君が世に何にたとへんさざれ石の巖とならんほども飽かねば」と詠まれ、『和漢朗詠集』(祝部・七七五)には、作者は未詳ながら「わが君は千代に八千代にさざれ石の巖となりて苔のむすまで」と詠まれていることが知られ、この後も『栄花物語』(巻十「ひかけのかづら」)、謡曲『老松』などにも類歌が引かれるなど、多くの伝誦例が見られる。当歌をもつて祝うことは早くから通例となっていたようである¹。

さて本話は、このように平安時代以降詠み継がれてきた「さざれ石」の和歌を、薬師如来の御詠として伝えている点に特徴がある。『さざれ石』は、信心深い姫宮を主人公とする、薬師如来の利益を説いた物語で、梗概は次の通りである。

成務天皇の末子の姫宮は、数多くの皇子たちの末子であることから「さざれ石の宮」と呼ばれた。十四歳の時、

摂政殿の北の方となる。姫宮は信心深く、朝夕、薬師の

名号を唱えていた。ある夕暮れ、東の空を眺めていると、

薬師如来の使いである金比羅大将が天降り、不老不死の

妙薬の壺を受けた。その青い瑠璃の壺には白い文字で

「君が代は千代に八千代さざれ石の巖となりて苔のむす

まで」という歌が書いてあつた。姫宮はその壺の妙薬を

口にする。以来、姫宮は巖の宮と呼ばれるようになり、

成務天皇から清寧天皇の御代まで十一代、八百余歳、何

時までも若々しい姿を保つた。ある夜、一心に薬師の真

言を念じていると、薬師如来が尊い姿を現し、姫宮を東

方淨瑠璃世界へ導いていった。上代以来、このよくなめ

でたい例は前代未聞である。末世の今でも神仏を念ずる

人に効験がないということがあるうか。南無薬師瑠璃光

如来、南無薬師瑠璃光如来。

(御伽文庫本による)

『さざれ石』は、享保年間(一七一六—三六)に刊行

された渋川版二十三編(御伽文庫本)に含まれており、

流布した作品であるが、伝本は比較的少ない。「室町時

代物語類現存本簡明日録」(『中世王朝物語・御伽草子

事典』所収、以下「簡明日録」)には次のようにあり、

文教本は、ここに新たに加わる一本となる。**を付し

た伝本は「簡明日録」に私に付記したものを指す。

○さざれ石(別名 鶴亀物語)

(一)イ [江戸前期] 刊丹緑絵入横本(日本民芸館)

御伽文庫本

(二)イ 口 スペンサー・奈良絵本 小一帖

穂久邇・絵巻 大一軸

国会・絵巻(「鶴亀松竹物語」二軸の内の

上巻) 口

東洋大・絵巻(題簽「鶴亀草子」) 大一軸

某氏・絵巻(箱書「鶴かめ松たけ」大一軸

の内の上巻)

文教大・屏風(元絵巻) **

※小野幸・奈良絵本 横一冊

※個人蔵・絵巻 大一軸(徳川美術館図録『絵でたの

しむ日本むかし話』) **

右に挙げた「簡明日録」では、伝本が二系統に大別さ

れている。大きな相違点として、文教本を含む(一)の

系統では、薬師如来から(金毘羅大将を使者として)不

老不死の妙薬の壺を受けられた後、姫宮自身が直接人々

に薬師の遺徳を説いており、薬師如来からこの世に長ら

えて薬師の法を広めるよう命じられる場面がある。姫宮

の父である成務天皇も姫宮の勧めにより信心をおこし、

やがて御代を皇子に譲り、皇子は仲哀天皇となり、成務天皇は院となつて、薬師の名号を唱え、長寿で末永く榮えたとある。このように、(一)の系統は、薬師への信仰による繁栄と長寿をもつて物語を締めくくつてゐる。また、姫宮のもとを訪れた薬師如来は「左の御手より金泥の法華経を取り出し」て姫宮へ授けるなど、法華経信仰の要素も認められる。

しかし、(二)の系統にはこのような場面は見られない。先の御伽文庫本の梗概に記したように、(一)の系統では、姫宮のもとを訪れた薬師如来は、「なんちは、いつまでこの世界にあらん。(中略) 何事も心のままの極楽なれば、さのみはいかで八苦の世界にあらん」(御伽文庫本)と言い、姫宮を東方淨瑠璃世界へ導く。その身を変えず、女人がその身のまま(女性の姿のまま)成仏することの奇蹟と神仏に祈願することによる利益、薬師如来の真言をもつて物語を締めくくつてゐる。(二)の系統では、姫宮は現世において薬師の利益を人々に伝え続けるが、(一)の系統では、姫宮は薬師如来によつて東方淨瑠璃世界へと導かれていくというように、結果に大きな違いがみられる。

文教本は、現存が確認されている伝本のなかでも、流布した御伽文庫本とは異なる(一)の系統の本文で、中

でも、国立国会図書館が所蔵する絵巻(以下国会本)に極めて近い。同系統(二)ロ系統の本文として、東洋大学附属図書館が所蔵する絵巻(以下東洋本)があるが、詞書は、東洋本よりも国会本により近い。東洋本は、国会本や文教本に比べ、全体的に説明的な加筆が若干見られる。具体例として、その傾向が顕著に認められる冒頭から最初の方の異同を一部抽出して挙げると次の通りである。(文) || 文教本、(穗) || 穂久邇本、(国) || 国会本、(東) || 東洋本を表している。比べると、東洋本に説明的な加筆が認められ、また、文教本と国会本の一致度も確認できよう。

(文) それ

あめつ

ちひらけはしまりしより

(穗) それ

あめつ

ちひらけはしまりしよりこのかた

(国) それ

あめつ

ちひらけはしまりしより

(東) それ鶴かめのゆらいをくはしくたつぬるにあめつ

ちひらけはしまりしよりこのかた

を有している可能性が高い。文教本を含む絵巻系伝本は、いずれも江戸時代前期の豪華本である。さざれ石の宮の成長を重ね、長寿と繁栄を願う祝言性をもって、このような豪華本が求められ、制作されたこともあったのではないか。

文教本に描かれている六場面は、概ね他の絵巻系伝本が描く場面に共通しているが、第三場面の博士が姫宮に占いの結果を伝えている場面は、東洋本には見られない挿絵である。東洋本には、文教本・国会本に該当する第三場面が見られない代わりに、姫宮が女性たちを教化する場面がある（東洋本第四図）。

文教本の挿絵が、挿絵を確認し得た国会本と東洋本のいずれに近いかを判断することは難しい。【図1】挿絵場面一覧の備考欄に記したように、国会本は文教本に比べ一図少ないものの、描いている場面は文教本と重なる。しかし、第六場面の天人による管絃の場面では、文教本の構図は東洋本に近い点が認められ、また第四場面の文教本の童子の姿は、国会本・東洋本とは異なるなどの違いがみられるためである。

【図1】挿絵場面一覧

		場面						備考	
		1 大切に育てられるさ ざれ石の宮	2 果作り	3 博士が姫に占いの結 果を伝える	4 童子より薬壺を授け られる	5 教化する姫宮	6 天人らによる管絃	7 姫宮一族の長寿と繁 栄	
文教本	国会本								
		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	文教本・東洋本 親鶴2／雛鶴3／亀4。 東洋本親鶴2／雛鶴3／亀2。
		①	②	③	×	④	⑤	⑥	文教本の童子は座姿だが、國 會本・東洋本の童子は立姿。 鶴（親鶴・雛鶴）の描写あり。
		①	②	③	×	④	⑤	⑥	文教本・東洋本は邸内での場 面。國會本は飛雲に乗った天 人らによる管絃場面。

【図1】の一覧には、後半の物語の展開に違いがみられるため、御伽文庫本の挿絵は含まなかつたが、不老不死の妙薬を授けるために姫宮のもとを訪れた金毘羅大将の容姿は、御伽文庫本と絵巻系伝本とその描写が異なる。御伽文庫本では、甲冑姿で髭を生やした夜叉神が描かれているが（【図2】）、絵巻系伝本では、いずれも天界をイメージさせる装いの童子姿で描かれている（【図3】）。このような挿絵の相違は、両系統の詞書の違

いによる。

御前に虚空より金の天冠を額にあてたる官人一人参り、さざれ石の宮に瑠璃の壺を捧げ申し「われは、薬師如來の御使はしめ金毘羅大将なり」とぞ申しける。

(御伽文庫本)

虚空に音楽きこし、花降り下り、紫雲たなびくを姫君あやしと御覽すれば、雲の内より鬟づら結ふたる童子一人、忽然として姫宮の御前に参りの給ふやう。我はこれ薬師の十二神将の内、金毘羅大将なり」とて瑠璃の壺を取り出し、姫宮に与へ…

(文教本)

【図2】 淋川版



【図3】 文教本



絵巻系伝本はいずれの伝本も美しい挿絵が目を引くが、特に文教本は、詞書に沿った細かな描写が見られる。例え、不死の妙薬は「瑠璃の上に白き文字」の摺られた壺に入っていたとあり、国会本と東洋本の壺に文字は見られないが、文教本では、瑠璃色の壺の上に白い文字が確認できる。また、先に述べたように、文教本は、長大画二場面を有していること³、鶴亀を描写した場面が二場面見られ（第二・三図）、さらに、第二図ではつがいの鶴に加え、雛鶴、亀については四匹描くなど、細やかな描写のなかにも、祝言性が色濃く表れている⁴。

『さざれ石』において、姫宮に授けられる不死の薬は、『竹取物語』の富士山の由来に通じるエピソードとともに知られるが、『さざれ石』以外のお伽草子にもしばしば見られる。例えば、『不老不死』は、天竺⁵の例として、耆婆が不老不死の仙薬を舐めて天仙となつたこと、中国の例として、劉安が仙人に不老不死の方術を教わつて天子へ上つたこと、徐福が秦の始皇帝の命により不老不死の薬を求め、紀伊国熊野浦まで訪れたこと、漢の武帝が、西王母から不老不死の作り方を教わつたことなどを伝えれる。日本では、小彦名命が不老不死の妙法を神たちに授けたため、神たちは長生不死の齢を保つたこと、田道間守が雄略天皇の命により蓬萊山へと出向いて不老不死の

方術を手に入れたことを伝えるなど、不老不死をめぐる逸話が集められた物語となっている。同様に『蓬萊物語』も、不老不死の薬があるという蓬萊山をめぐる唐堯、田道間守、始皇帝と徐福、漢武帝と西王母、玄宗と楊貴妃の話を挙げ、最後に、『浦島太郎』の話を思わせる安曇

安彦の話（蓬萊山へ漂着し、蓬萊宮を見物した安彦は不老不死の薬を与えられるが、故郷へ帰るとすでに三百年余りが経過しており、不死の薬は帝へ献上する。その後、安彦は通力自在の仙人となるという話）を挙げる。このほか、『すえひろ物語』では、末広がりの扇を考案した豊丸の息子季広は、佐伯郡に所領を受け、「長生不死の薬」を練つて帝に奉納したとある。不死の薬そのものは見られないものの、『七草草紙』は、長寿の秘訣を伝えている点でこれに類する話と言えよう。

これらの物語は、不老不死・不老長寿を願う祝儀物のお伽草子として知られ、他にも数々の作品がある。『鏡破翁絵詞』の深山の隠れ里に迷いついた翁が歎待を受け不老不死の薬と砂金をもらうという展開は、祝儀物の延長線上にある展開という見方もできよう。また、日本芸館が所蔵する『浦島太郎』は「その後、浦島は鶴に生まれ、亀に戯れをなし、朝夕遊び戯れ給ひける。君が世は千代に八千代にさざれ石の巖となりて苔のむすまで苔

のむすまで」と結ばれており、『古今和歌集』以来の「さざれ石」の和歌が、鶴亀の祝言で結ばれており、『さざれ石』の祝言性に通じる点が認められる。

（付記）本稿は、二〇一〇・二一年度の日本文学演習の授業において、学生との輪読の成果をもとにまとめたものである。東洋大学附属図書館には、コロナ禍であるにも関わらず丁寧なご対応をいただき、絵巻の詳細を確認することができた。また、国立国会図書館本は「国立国会図書館デジタルコレクション」所収の「鶴亀松竹物語」を参照した (<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2590863>)。記して御礼申し上げたい。

注

1 日本でのこのようないわゆる「さざれ石」の和歌の広がりに先行するかたちで、唐代の『酉陽雜俎続集』（卷二）に、さざれ石の話が所収されていることが指摘されている（『中世王朝物語・御伽草子事典』「さざれ石」項）。そこには、ある漁師が網にかかった拳ぐらいの石を寺僧に頼んで仏殿においてもらつたところ、

石がそのまま成長し、一年で四十斤になつたという話が見られる。

『さされ石』

(翻刻) 文教大学文学部日本語日本文学科所蔵

『さされ石』

横山重・松本隆信編『室町時代物語大成』六、角川書店、一九七八年。

国会本と東洋本では、第一場面が長大画となつている。

文教本の四匹の亀はつがいの亀と子亀二匹で繁栄を描いているようにも見える。

(本学准教授)

『書誌』

屏風(六曲一双)、元絵巻。

総丈堅:一〇一・五糸

横:一九五・〇糸

紙本著色金泥極彩色画、銀地台貼

料紙:斐紙(金泥下絵入)

挿絵:六図(内長大画二図)

成立:江戸時代前期(寛文・延宝頃写)

『凡例』

一、原本通りに翻刻した。改行も原本のままとした。

二、当本は元絵巻で、配置に一部乱れがある。翻刻では、順序を正して翻刻し、詞書の料紙の切りかわりを示した。絵巻だった当初の一紙分を意味するわけではない。便宜上、第(1)紙、第(2)紙などと示した。なお、翻刻したそれぞれの料紙の配置は、【図7】全体配置図で示し、挿絵、詞ともに番号を対応させた。挿絵の位置は、該当箇所に()示し、その内容を記した。

《翻刻》

【右隻】

それあめつちひらけはしまりしより
にんわうの御代となりめてたき事は
しんむ天皇より十三代にあたらせ給
みかとをはせいむ天わうとそ申けるこの
みかとはたみをあはれみくにをめく
みはんきのまつりことおたやかにまし
くけるそのうへわうしあまたもたせ
給ひしかすゑにあたらせ給ひしはひめ
みやにてそおはしましけるかすおほき
わうしたちの御すゑなればとてさゝ
れいしのみやとそ申ける

御かたちいつくしく

こゝろさまま

ことに

ならふかたこそな

かりけれ

」第(1)紙

(第一図 成務天皇の繁栄の様子と末娘さされ石の宮)

みかと御てうあいなのめならすいつきかし
つき給ひけるさるほとにかのひめきみ
御とし十四さいにならせ給ひければ
せつしやうとのゝきたのまんところに
たゞせ給ふしいかくはんけんのみちくら
からすきやうろんしやうけうにいたる
まで一しとゝこをる事もましまさす
あるときひめ宮おほしめしけるやうは
それふつたうをねかふにほけきやう一
のまきはうへんほんにとかれしは十方
ふつと中ととかれしうへはほとけは
いつれも十方にあるなり中にもとう
はうのしやうるりせかいのやくしにし
くはあらしそれはんふつはひかしより
はしまりさてねはんのみやこにおさ
まるなれば人けんしゆつしやうのはし
めなればこのしやうるりせかいをしらては
なにのえきかあるへきとてあけくれを
こたらすやくしのみやうかうをのみとなへ
させ給ふまことにありかたきことゝもや
ある日のつれくにひめ宮ひろえんに
いて給ひやくしの御名をとなへよもを

」

」

くはんしておはしけるところへいつくとも
しらすまなつる一つかひとひきたりまつ
のえたにすをくふてうたひけるは松のえ
たにはひなつるのすたつをみればうこきな
きいはほのかたにあるかめのちよよろつ
世もかきりなくいはふは君かためなれや
こゝろもきよきいけ水のすめるはひろき
めくみかなとうたひてはまひあかりては
まひそひたはふるゝありさまひとへに
めでたきことゝもなり

」 第(2)紙

(第二図 摂政の北の政所となつた姫宮のもとに飛来す
るまな鶴が松の枝に巣をつくり、巖には亀がいる。め
でたい事この上ない)

ひめ宮は御らんしてさてもふしきなる
事かなとおほしめしやかてはかせをめ
しうらなはせられけるはかせ御まへにま
いりときのさうこくさうしやう日のさ
うしやうをかんかへよこ手をはたと
うちてさてもめてたきことゝもかな
それつはさおほしと申せともつるは千

年のよはひをのふるなりされはうたふ
こゝろはきみのきみにてわたらせ給ひ
ければおんこくはんりのはたうまで
もうこきなくおさまるへし又ひめきみ
の御いのちはちとせかあひたもくちすまし
きとのうらかたなりと申ければひめきみ
なのめにおほしめしいろくのひきて
ものを給はり

はかせはやとにそ
かへりける

」 第(3)紙

(第三図 博士が占いの結果を姫宮へ伝える)

かくてひめきみはあるゆふくれのことなる
にさやかなる月のさしいて給ふやまの
はをなかめやりわかねかふしやうとはそ
なたそとおほしめしこゝをすましおはし
ましけれはこくうにをんかくきこはな
ふりくたりしうんたなひくをひめきみあ
やしと御らんすれば雲のうちよりひん
つらゆふたるとうし一人こつせんとし
てひめみやの御まへにまいりのたまふ

やうわれはこれやくしの十二しんしやうの
うちこんひら大しやうなりとてりの
つほをとり出しひめ宮にあたへきみ
あまりにやくしのみやうかうをいとたつと
くとなへ給ふ御こゝろさししやうとにつ
うしそれかしを御つかひにくたされし也
又このつほのうちにらうやくありこれ
をなめ給はゝ御いのちもつきすいつもわ
かきすかたにてかなしき事あらしといひ
すてゝ又くものりてこくうにあからせ
給ひけるこそふしきなれ
さゝれいしの宮このつほをうけとり
給ひあらありかたやこのとし月ねかひ
たてまつるかひありてかくのことくのき
すいあるこそありかたけれどさんとらい
し給ひつゝらうやくをなめ給へはまこと
にあまき事かんろのことしそのうへまた
つほをよくく御らんすればるりのうへに
しろきもしすはれりよみて御らん
すれは哥あり
君か代はちよにや千よにさゝれいしの
いはほとなりてこけのむすまで

— 第(4)紙

【左隻】

となんありけりこれすなはちとうはう
しやうるりせかいのあるしやくしによ
らいの御詠哥なりそれよりもやかて
御名を引かへさせ給ひいはほの宮と
そ申けるそのゝちとし月をゝくり給ひ

— 第(5)紙

(第四図 浄土を願う姫宮のもとに忽然と童子が現れ、
自分は薬師如来の十二神将の金毘羅大將であると名乗
り、瑠璃の壺を姫宮に与える)

めしいよ／＼たつとみやくしのみなをのみ
となへさせ給ひける御宮つかへの人／＼も
かくめてたきひめきみにつかへたてま

— 第(6)紙

つることひとへにたしやうのきえんなれ
とてをのく心をつくして宮つかへ申
けるひめきみおほせけるやうはいかにめん
くきゝ給へわれかくめてたきよはひを
のふることもひとへにとうはうしやうるり
せかいのけうしゆやくしによらいの御は
からひなりかたくもたつとみ給へと
おほせければ御まへの人くもけにかた
しけなきしたいかなけふよりはいかにも
してやくしのみやうかうとなへ侍らんと
てをのくひめきみの御けうけをそ聞
給ひけるその時ひめきみおほせけるは
そのきにてあるならはみなくわかけ
うけをきゝ給はあらくやくしのると
くをかたりてきかせんと有ければ御まへ
の人くこれは有かたきしたいとてみゝを
すましくひすをついてそきゝ給ひける
ひめ君おほせけるやうはそれやくしと申
たてまつるは此せかいのけうしゆとして
とうはうしやうるりせかいをつかさとり
給ふされはるりの二しは玉にとまる
玉にはなるとかけりその心は玉と

』

『 第(7)紙

いふはいのちなりそのゆへに玉をせか
いのたからとせり此たからのいのちを
こくうより人けんにあたへ給ふをやく
しによらいうけとり給ふところをると
いふて玉にとまるなりさて又この
いのちをせかいのしゆしやうにそなへ給ふ
をりといふて玉にはなるなりそれ
によつてとうはうはせかいのはしめとして
はんほくも春はさかゆるなり秋はぢり
てふゆはおさまるなりこのおさまる
ところをねはんのみやこといふなり
やくしよりそなへ給ふたからのいのち
を又もとのやくしへかへし申をきみや
うといふていのちをかへすと申なりと
の給へは御まへの人くこれをきゝま
ことにけうしゆしやくそんのをしへを聞
心ちしてをのくかんるいをなかしてを
あはせたつとみけるさるほとにひめ宮
はいよくたつとくおほしめしをこたら
すみやうかうをとなへ給ふあるよともし
火をかゝけたひとりやくしのしんもん
をかんしておはしけるかけしからすいきや

』

うくんして花ふりくたるひめきみいか
なることやらんと心をすましおはしけれ
はかたしけなくもやくしによらいはし
けんしたまひてたつとき御こゑを出し
いはほの宮にむかひの給ふやういかに
なんちわれねんする事しゆせうなり
さるによりてふらうふしのくすりを
あたへしなりいつまでもこの世になか
らへてわかほうをひろめむえんのしゆ
しやうにをしへ給へやわれはとうはうし
やうるりせかいのあるしなりとてひた
りの御手よりこんていのほけきやうを
とり出しいはほの宮にたてまつりいよ
くをこたらすわれをねんせよすこし
も物うき事あらしとのたまひければ
ひめきみ御きやうをうけとり給ひあら
ありかたの御ことやおなしくはによらい
のすませ給ふしやうとを一めおかみた
てまつらはやとの給へは御そうきこしめし
やすき事さらはとうはうしやうるり
せかいのありさまをたゞ今こゝにうつし
てみせ申さんとてひかしにむかはせ

」第(8)紙

給ひてしゆをとなへ給へはにはかにはな
ぶりおんかくきこえしうんみちくにてん
人はけいしやううのきよくをなしほ
さつしやうしゆはめんくにくはんけんの
やくをつとめおもひくのすかたにて
ひめきみをはいし給へはひめきみ御らん
してあらありかたの御事かゝるきとく
にあふ事もひとへにやくしの御めくみ
そとかんるいをなかしたつとみ給ふ
御そうおほせけるやうはいつまでかくて
あるへきそや今はゝや御いとま申さんと
ありければひめきみ今しはして御
ころものそてをひかへ給へはいつまでかく
てもつきせし

又こそとの給ひて

こくうをさして

あからせ

給ふ

」

」第(10)紙

(第五図 姫宮が誦を唱えていると音楽が聞こえ、紫雲
がたなびき、天人らが霓裳羽衣の曲を奏でる)

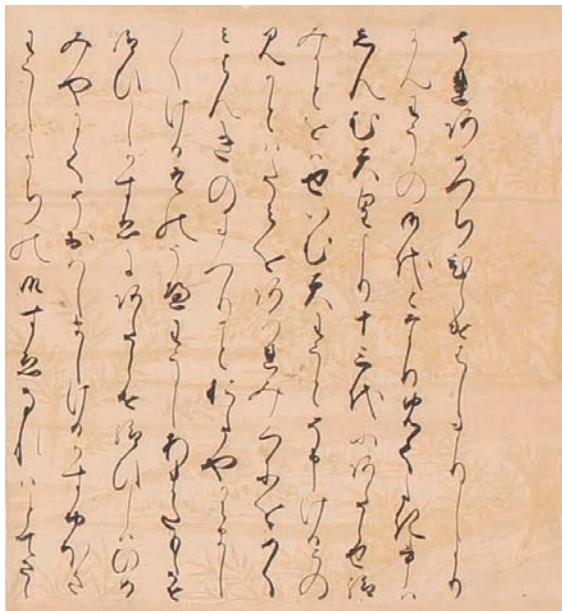
」第(9)紙

ひめ宮たつとくおほしめしそれよりい
よくしんくきもにめいしけりかく
てこのよしちゝみかときこしめしさても
ふしきのしたいかなとてそれよりもひ
め宮の御すゝめに入給ひおなしくしん
くをおこし給ひてやくしのみやう
かうをとなへさせ給ひければまことに
をしへのことく御いのちもなかくつる
にものうき事もなく一てん四かいも
おたやかにおさまりけりせいむ天わう
はいつまでもあるへけれとも世のそし
りもいかゝとて御代をわうしにゆつり
給ひてちうあい天わうとかうし御身は
るんにならせ給ひあけくれやくしの
みやうかうをとなへ給ひければ御いのち
もなかく御かたちもかはらすめてたく
こそさかへ給ひけれどことにたつと
むへきことゝもありかたしく

(第六図 姫宮一族の長寿と繁栄)

」
第(1)紙

【図4】詞書（冒頭）



【図5】第二図
(右隻)



【図6】第四図
(左隻)



【図7】全体配置図 * 詞書の配列は(1)～(11)の順。挿絵は詞書の内容から第一図より順に番号を付した。翻刻もこの配列に従う。

文教本『さざれ石』右隻

